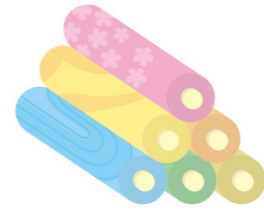


# 夢織れ新聞



## 勝山の手織りの世界で オリジナルの作品を作る



勝山と言えば、恐竜博物館やスキー場はすぐ頭に思い浮かぶ人は多いと思うが、勝山は福井での織物の里ということをご存じの人はどれくらいいるだろうか。

明治時代から始まった勝山の織物産業は、市民だけではなく、福井県誇りになっている。私たちは、福井大学の留学生として、勝山市に行き、ゆめおーれ勝山というところで、織物の世界に入り、そこにあるはたや記念館という織物の産業の博物館を見学したり、手織りやまゆ玉の体験をしたりした。体験を通して、自分のオリジナルな織物ができただけでなく、スタッフにインタビューしたら、多くのことが勉強できた。今回の記事には読者に織物の体験と昔ながらの産業を守りたい人達に教えてもらったことを紹介したいと思う。

### ゆめおーれ博物館



ゆめおーれ博物館の前門(撮影:KIEU BANG NGAN)

ゆめおーれ博物館は勝山にある勝山の織物の歴史を紹介するところだ。最初は潰れる予定織物工場だった。しかし、市民が反対したので、残された。平成19年に政府からの補助金で、建物の改修と構造補強を実施した。平成21年に『ゆめおーれ勝山』としてオープンした。平成30年に100万人来館した。今もさまざまな講座やイベントが行われている。

### 織物の歴史を知る体験コーナー

#### ①手織り体験

料金：310円 体験時間：40分程度

私たちはゆめおーれ博物館で手織りを体験した。まずは、柄を考え、太い糸または細い糸を選んだ。そして、スタッフの指導のもとで、織り始めた。最後は、はさみで

糸を切ると、コースターが出来上がった。とても簡単に見えるが、綺麗な作品を作るように工夫しなければならないと思う。そのほかに、コースターを作りながら、多くの子供たちの楽しんでいる様子も気づいた。「はたおり」の仕組みを学びながら、好みの糸でオリジナルコースターを作ろう。



メンバー4人の織っている姿(撮影:スタッフさん)



四人の作品(撮影:LIN WAN PING)

#### ②まゆ玉クラフト体験

料金：360円 体験時間：40分程度

私たちはまゆ玉クラフトを作るという体験もした。まずは、いろいろな見本を見て、自分の好きなまゆ玉クラフトを選んで、材料のまゆを受け取った。そして、カッターやはさみでまゆを切ってパーツを作った。最後は、パーツをボンドでくっつけると、とても可愛いまゆ玉クラフトが出来上がった。私は今年幸せと願っているので、「招き猫」を作った。とても楽しかった

と思う。まゆ玉を使って、かわいい動物や恐竜のおもちゃを作ろう。

#### ③記念館見学

楽しい体験ができるだけでなく、はたや記念館は「繊維のまち・勝山」の歴史と魅力を紹介してくれる。そこで、絹織物「羽二重」の製造や、機械が動く様子を見ることが出来る。そして、100年以上つづく勝山市の織物産業の歴史を写真パネルとモニター映像で振り返ることも出来る。それから、絹、人絹(レーヨン)、ポリエステルを見て、手で触れてその違いを感じることも出来る。さらに、無料のまゆの糸とり体験もあって、まゆから出てくる絹糸を手動の道具で巻き取ることが出来る。とても面白かったと思う。ゆめおーれ博物館に一度行ってみよう。



メンバーが機械を回っている姿

(撮影:CHEANG HIO WAI)

### 体験コーナーを行うきっかけ

ゆめおーれ博物館館内には様々な体験コーナーがあり、勝山市の産業である織物の世界を楽しめる。そして、この記念館は昔の機屋を建物を活かして、博物館として利用している。博物館の見学を通じて勝山の織物歴史を学ぶことができる。今回、私たちは手織りとまゆ玉の体験をさせて頂いた。そして、博物館を見学する時に、博物館のスタッフ木村さんにインタビューした。

#### ①10年前に博物館になったきっかけは？

木村さんによると、「ゆめおーれ記念館は昔織物工場として大活躍したが、20年前に儲からないのでやめた。そして、この建物は取り壊されることになった。しかし、100年以上の歴史的な建物なので、やはり歴史的なものを残さないといけなかったので、保存してほしいという声が上がっていた。結局に、10年前からここは博物館として残された」という。

#### ②なぜ子供向けの体験コーナーに取り組んでいるか？

最初、ゆめおーれは博物館だけだったのが、博物館は一回見たら終わりなので、人は来ない。だから、体験とか、店を入らないうと人が来ない。でも体験を入れると、やはりリピーターや子供などが来る。

また、子供はやはりこれから勝山を背負ってくれる子供たちなので、将来勝山から出たりする時に、自分の町の恐竜だけでなく、織物産業についても誇りを必ず持ってほしい。自分の町が凄い良い町だと思えるのは、やはり歴史を知ることだ。

「自分の国でも、自分の町でも、いい町だなど分からないと、やっぱりそれを誇りと思えないじゃないですか？子供たちは体験に来るかもしれないけど、見学することによって、勝山を認識できますよね。ゆめおーれ記念館はこういう風な形で子供たちに力を入れていますよ。」と木村さん。

### 日本の経済を支えた福井県の織物

福井県の織物産業は長い歴史があり、江戸時代の終わりから越前の紬(つむぎ)という製品で全国で有名であった。やはた記念館によって、明治30年代ごろ、群馬県から伝えられた「羽二重(はぶたえ)」という織物の技術と機械の発達とともに、特に勝山市と小野市で織物は盛んになり、生産量が日本一で外国に注目されたようだ。その時、勝山市をはじめ、機械力と技術が広まり、県内に織物工場が急激に増えた。そ

して、大正3年(1914)、外国に輸出された日本製の織物には、福井産の織物が6割を占めたが第一次世界大戦後による不況で、輸出量が減少した。ちょうどこのころ、人造絹糸の織物が生産し始まった。昭和時代に入り、人絹織物の需要が増加したため、機械の導入により、生産量が伸び、福井県は「人絹王国」と呼ばれた。だが、昭和20年(1945)、敗戦国の日本は経済負担が以前よりとても大きくなった。戦後、復興対策や「ガチャマン景気」により、産業が困難を乗り越え、国の経済を支えた。

ガチャマンという言葉は「機械を一回動くと、1万円が儲かる」という意味である。昭和25年(1950)朝鮮戦争で、織物の要求が高くなり、ガチャマン景気と呼ばれる時期で、重要な織物の産業地として、福井県が経済を復興させる役割を果たした。

### 現状と未来

勝山の織物の産業は明治の頃から賑やかになった。着物を着る人が少なくなったり、稼げないということから、小さい会社が一つずつ潰された。新しい製品やさまざまな技術を開発し、コストを下げるように、努力してきた。木村さんによると、織物産業はジェットコースターのように、上がり下がりも激しいという。社長たちが織物の技術を地球から宇宙までさまざまな分野に活用し、よりいい質の織物を開発、提供していこうと思っているそうだ。

### まとめ

今回の体験で、手織りの世界へ行ってみたい。歴史や作品などさまざまなことが勉強になった。織物を作るのが時間がかかったが、出来上がったのが感動した。みなさんぜひ一度体験しに行ってみてください。

この新聞の取材：

19532014 CHEANG HIO WAI  
195315190 KIEU BANG NGAN  
19532001 LIN WAN PING  
19532004 LIAO WEN YU